

「逆ポーランド記法」 プログラミングの妙

話が長くなるのは年寄りの癖なので、前稿から分離したけれど、「逆ポーランド記法」は、科学技術発達史の一分野を形成する「コンピュータ・プログラミング」の観点からも、なかなか興味深いものがある。

電卓設計者の視点に立つと、「逆ポーランド」は 4つの「スタック（演算用メモリーレジスター）」を使いながら、それを表には見せず、少ない基本ルールだけで自在に使いこなせるのである。

- (1) 「スタック」は、X、Y、Z、T、の 4つ。
- (2) 直接入力できるのは X のみ。表示されるのも常に X。
- (3) 「Enter キー」は X の値を確定し Y へ「コピー」する。
- (4) 演算は、X と Y の間で行われ、結果は X に収められる。
- (5) 「スタック」X、Y、Z、T、は自動でポップアップ、ポップダウン。

覚えておくのはそれが全て。簡潔過ぎて、これだけでその妙味を理解するのは難しい。実際のところ、スタック内の数値を入れ替えるキーが 2～3 あるけれど、それは忘れても電卓本体の裏面に図示してある。

Simple is the Best. この記法は、作り手の都合が透けて見える。（あるいは、ビル・ゲイツが BASIC を 4K に収めたように）プログラムのメモリー容量を節約することが美德であった時代の産物なのだ。アキュムレータ 4つ、というのは、データ・ゼネラル社の NOVA と同じだし、私の頭はその時代に凝り固まっているから、直のこと判りやすい。

「逆ポーランド記法」がそんなに素晴らしいのなら HP（ヒューレット・パッカー）の電卓を一度使ってみようか、と思い立ったあなたへ。昔の同僚 A 君からの報告に拠れば、昨年「HP-35s」なる復刻版が 8,000円かそこいらでネット販売されているとのこと。（秋葉原では店頭販売を見かけた。）懐かしの LED 表示ではなく、流石に液晶だけれど、「逆ポーランド」だけは健在である。

（初出 Jul. 14, 2008）